# ロシア語における e>o について

千葉萠一郎

東スラブ語の音声の上での特徴の一つに e>o (ё) がある。

この現象は周知のように，古来の e 及び ь>e が，古来の軟子音及び j の直後で，又後に г, к, х, を除くかつての半軟子音の直後，硬子音の直前の位置で生じた。シュー音が後に硬化したことを別とすれば，その直前の軟子音はその軟音を保持した。

古来の e：вёл, жёсткий.

ь>e：　лён, жёлтый.

東スラブ語において，いつ頃から e>o 現象が現れ，どのような地域に，又どのような形をとって経過していったかということについては諸説がある。

例えば，前世紀に e>o は，全ロシア的過程であったとする説があって，ただ問題としては，アクセントのない場合でも e>o は，全ロシア的過程でありえたかということであった。

A. A. Потебня は，南大ロシア語方言において（従って白ロシア語においてもそうであるが）e>o はアクセントの下にのみ生じたとした。аканье, яканье 方言においては，アクセントのない場合には生じなかったし，又生じるはずがなかった。なぜなら，アクセントのない o は存在することができなかったからである。これに対し M. A. Колосов は，e>o はアクセントの有無にかかわらず，東スラブ語全域に生じたとしている。

この両説について Ф. П. Филин は，前世紀においては東スラブ語史及び方言学が，ある程度の満足される事実を捉えていなかったので，この両論は多くの点で思弁的であることを免れないと評している。

ところでこの論争は引続き今世紀にも及び，Л. П. Якубинский は A. A. Потебня の説を，П. Я. Черных, М. Т. Баранов 等は M. A. Колосов の説をとっている。

例えば Л. П. Якубинский は，аканье 方言において，標準ロシア語，白ロシア語においては，アクセントの落ちた e のみが o に移ると述べているが，П. Я. Черных は，第一に考えなければならないことは，古代ロシア語期には，аканье が生じるまでは，北東 Русь の東スラブ語方言においては，e に代る o の使用はアクセント音節に限られてはいなかった……然るに古代には，現在 аканье をとる他のロシア語方語，特にモスクワにおいても，同様の可能性がある。……e 及び ь>e からのこの新らしい o は，北部及び南部で，すべての東スラブの地域において，幅広く拡大したとしている。又，M. A. Соколова は，古文献によってロシア語活動の一層古い時期におけるこの過程を観察し，同じくウクライナ語の事実に眼をとめる時，過去においてアクセントは，何らの役割も演じていなかったことが確信されると述べている。

次に，以前から注目を集めていた問題は，シュー音と j，及びかつての半軟子音の直後において，e>o の現れ方に順序があったかということである。

И. В. Ягич によると，はじめ e>o はシュー音及び j の直後に現れて，やがてかつての半軟子音の直後に発展した。そして，この条件においてのみ e>o がウクライナ語に現れているとしている。

А. И. Соболевский は И. В. Ягич の説くところと違って，e>o はシュー音及び j の直後においても，又かつての半軟子音の直後においても同時に生じたとして，同時論を唱えている。そして，古文献において，かつての半軟子音の直後の e が o として現れていないのは，古代ロシア語期の写字生が，これ等の子音の直後で o を伝える方法を知らなかったからであるとしている。

А. М. Селищев は更にこの説を発展させて，e>o は古い共通東スラブ語における過程であったとした。後にウクライナ語が成立した諸方言において，この過程は一般的な音韻方則として確立され，かつての半軟子音の直後においても e>o が生じたとしている。

ロシア語，白ロシア語において e>o は，ウクライナ語に比べて幅広く現れている。ウクライナ語においてはシュー音及び j の直後にのみ現れているが，ロシア語，白ロシア語においてはそれのみか，かつての半軟子音の直後においても現れている。このために А. А. Шахматов, Н. Н. Дурново, Л. П. Якубинский 等は，e>o の現れ方に二つの段階を予想した。第一の段階は，シュー音及び j の直後で，第二の段階は，かつての半軟子音の直後である。

Л. П. Якубинский によれば，第一の段階は，ロシア語にも，ウクライナ語にも，白ロシア語にも反映された。それは古い古代ロシア語の諸文献によっても確認される。この場合 e>o は，j 及び他の古来の軟子音（ж, ш, ч, ц）の直後に生じている。比較：ウクライナ語 жона, чоло, пшоно, 北ロシア語 жона, пшоно, 南ロシア語 жонка, пшонный, чолка 等。

第二の段階は，ロシア語及び白ロシア語が成立した，古代ロシア語の基盤においてのみ生じ，東スラブ語のうちのロシア語及び白ロシア語に反映されている。この過程は軟子音の直後，硬子音の直前で，同様に語末においても実現されたとしている。比較：селó, сéльский, しかし сёла. вéсело, весéлье, しかし весёлый 等。

次に，e>o が生じた条件と，この条件が存在した時期について考察を試みたいと思う。生じた条件については，ことさらの議論もなく，すべての学者によって等しく認められているように，e に後続する硬子音が，直前の母音 e に与えた唇音化の結果にほかならないとされている。

П. Я. Черных の説明によると，古代ロシア語において硬子音は，現代とは違った発音が行なわれていた。それは唇音化された子音であった。つまり，円口の程度は常に一様ではなかったにしても，多少前方につき出されて円められた唇の運動を伴って発音された。o 又は y 直前の硬子音は，a 又は ы の直前の硬子音に比べて一層唇音化が進んでいた。その結果，唇音化された硬子音の直前の e は，時とともにその影響を深めて e>o を生じたのであるという。

e が唇音化を蒙るには，必らず直前の子音が軟音であることを条件とする。かつての半軟子音が，未だ完全に軟化していなかった時は，e の唇音化は直前の子音に硬音化をもたらしている。例えば，*melko>молоко, *vыlкъ>вълкъ>волк. 従って，かつての半軟子音の軟化と，それによって生じる e>o は，疑もなく полногласие 成立以降となる。

Ф. П. Филин はこれによって e>o 成立を，《共通ロシア祖語》期の VI—VII—VIII 世紀とした А. А. Шахматов, その他の説を否定して，いずれにしても VII—VIII 世紀以降であると推定している。

ところで，В. Н. Сидров によると，e>o は弱い位置における ъ, ь の脱落した結果であるという。子音が直前の母音に対して与える影響は，同一音節内であることが実現を容易にする。それは，ъ, ь が脱落した結果生じた，閉音節内においてのみ可能であったとし，これらの閉音節から過程は始まり，やがて開音節に移っていったのであるという。

Ф. П. Филин は В. Н. Сидров の説に対して次のように述べている。В. Н. Сидров の仮説は，もし e>o が閉音節で始まり，それ以後にのみ普遍化し，開音節を捉えたことが立証されるならば，正しいと認められるであろう。しかしながら，そのような証拠はない。現代の東スラブ諸語においては（西スラブ諸語においても）e>o が主として閉音節で使用されているとか，あるいはそのような予想に役だつ何らかの徴候を指摘できる事実があればよいが，何らそのようなものはない。同様に，古代ロシアの文献でも，最初に e>o が現れたのは閉音節であったとは確認されていない。もしも具体的に立証することができないとすれば，どのような，最も鋭るどい仮説であっても，それは留意してもよいし，又しなくともよいという臆説以上のものではないとして退けている。更に Ф. П. Филин は，次のように述べている。e>o 現象は，子音の硬軟の相関関係の発展と緊密に結びついている。シュー音と j は，古来から対応関係をもたない軟子音であったので，これらの子音の直後における e の唇音化は，かなり早い時期に実現された。古代ロシア語の諸方言に生じた e>o は，ъ, ь の脱落の時期とは結びついていない。それは ъ, ь の脱落以前に現れた。対応関係をもつ軟子音の直後における e>o については，硬軟の対応関係が生じた過程においてのみ発達することができたのである。もちろん，理論的に e>o は，子音の硬軟対応の発展と同時に，シュー音及び j の直後で実現されたと考えることができるにしても，ウクライナ語及び古文献の資料は，むしろ，シュー音及び j の直後の e>o が，一層古いことを立証している。

以上学者による異る説のいくつかを紹介して来たが，真実はあくまでも具体的な事実を通してのみ明らかにすることができるであろう。

そのような意味で e>o の現れた最古の記録を求めると，XI 世紀にかかわる чоловѣка (Изборник Святослава, 1073 г.), жона (Изборник, 1076 г.) の二つがある。まぎれもなくシュー音の直後に e>o が現れている。しかしながらこの事実については，書き違い説をとる学者もいる。例えば，П. С. Кузнецов は，初期の e>o はごく稀なので，たぶん書き違いであろうとしているし，М. А. Соколова も又，おそらく，第 2 音節の o によってひき起された書き違いであろうと推定している。Ф. П. Филин はこれら書き違い説に対して，このような書き方がより後の書き方や，又現代の発音の基準に一致している時に，このような懐疑論は拒否されなければならない。古代ロシア語の正字法は，基本的には морфонематика であった。音韻的相違に達しなかった音声の組合せ変化は，正字法に反映されることはなかった。このような組合せ変化にかかわったのが，シュー音及び j 直後の e の唇音化である。e>o が対応関係をもつ軟子音の直後で確認され，ウクライナ語の基盤になった地域においてシュー音が硬化した以降においてのみ，e と新らしい o との間には音韻関係が成立する。音韻的価値をもたない音声変化は，特に文章の音声の側面に注意深いか，あるいは，独特の《書き違い》の形をとった《つい，うっかり》した写字生にあっては，正字法に反映されるとして，《書き違い》の必然性を指摘し，e>o はシュー音及び j の直後で，すくなくとも XI 世紀に始まったと考えることができるとしている。

東スラブ語諸方言における e>o 過程は，それぞれ異なった条件，方言的特徴によってばらばらに発展していったものであろう。なぜなら古代ノブゴロド文献には，現在のところ e>o 例は全く認められていないという。従って，はじめシュー音及び j の直後の e>o は，南方及び西方方言だけを捉え，やがて北方に拡大したものと見られる。XII—XIII 世紀にかけては，e>o 現象が増加の一途を辿る。それには А. И. Соболевский によって次のような例があげられている，съкажомъ, блажонъ, мужомъ, бывъшомъ (Слово Ипполита об антихристе

XII в.), врѣжон, съврьшонъ, осужонъ, шьдъшомъ, врачомъ (Житие Епифания Кипрского XII в.), борющомуся, носящому, рекшому (Лествица XII в.), приѥмшому, стоящомъ, поживъшомъ (Триодь Моисея Киевлянина XII–XIII вв.). e>o 現象は，XI–XII 世紀においては Киев, Галиция-Волынь の古文書に，XIII–XIV 世紀においては Смоленск-Полоция, Новгород-Псков, Тверь, Ростов, Суздаль, Москва の古文書に現れる。

しかしながら e>o は，すべてのロシア語諸方言に現れた訳ではない。Киров, Рязань, Тула の諸州においては，予想される o の個所に e が認められるという。しかも Рязань の一部方言においては，シュー音の直後においても現れるという。зéрны のみならず дешéвый がそれである。これについて П. С. Кузнецов は，これらの方言は古いもろもろの関係を現しているのか，それとも非唇音化の逆の過程を辿ったのか，最終的には解決されていないとしているが，Ф. П. Филин は，これらの地域の文献が，我々の手に届かなかったからであると述べるにとどまっている。いずれにせよ拡大の過程におけるばらつきは明らかである。

前述のように，XII–XIII 世紀には硬軟子音の相関関係の発展が始まると同時に，現代のウクライナ地方においては，かつての半軟子音が母音 e 及び j の直前で次第に硬化を始める。一方，北方及び北東方言においては，硬子音の直前で，しかもすべての軟子音と軟化した子音の直後で e>o が始まった。аканье 方言においては，アクセントの下にのみ e>o が生じたことは自明のとうりである。北方の оканье 方言においては，e>o はアクセントの下に全域に拡大したが，アクセントをもたない音節において，ある方言は古い é を保持して éканье として残り，又ある方言は e>o を体験して ёканье を生じた。例えば，сёлó, пёкý, сёстрá, вёснá である。しかしながらその詳細は審らかでない。

Ф. П. Филин は，XII—XIII 世紀の各方言による e の受取り方で，以下の方言帯に分類している。

1. 南方地帯（アクセントには無関係にシュー音，ц, j の直後で e>o がある）。
2. 西方地帯（アクセントの下にのみ軟子音，軟化した子音のすべての直後で e>o がある）。
3. 北方地帯（Новгород）及び北東方地帯（Ростов, Суздаль）（アクセントの下に，しかし一部はアクセントのない音節において，軟子音，軟化した子音のすべての直後で e>o がある）。
4. Ока, Дон の上流地帯（e を保持している）。
5. Карпаты 隣接地帯（恐らく，アクセントには無関係に e を保持している）。

その後第 4 及び第 5 地帯は次第に縮少していって，第 5 地帯は全く姿を消し，第 4 地帯はいくつかの孤島になって残在する。

ところで e>o が，どこよりも早く法則としての活動を停止したのは南方地帯であった。他の地帯でのこの法則の消滅は，XV 世紀頃と思われる。XIV 世紀にシュー音は硬化するが，しかしそれは語中の位置により，又方言の相違によって一様に経過した訳ではない。ロシア語及び白ロシア語では，多くの場合シュー音の直前で e>o を生じるが，シュー音硬化の不均等を示す各種の例外が見受けられる。ц の硬化は多くの方言において，大体 XV 世紀頃になる。周知のように，ц の直前では e が常に保持される。ということは，最終的に e>o が消滅した時期は，シュー音の硬化と ц の硬化との境界線上に求められるであろう。

次に，標準ロシア語において，e>o が期待されるにもかかわらず，実現されない場合があ

り，それをあげると，次のようになる。

1. бел, лес, сед, дело, лето, ветка, сетка 等において。すべてこれらの語の語根の e は，本来 ѣ であった。e>o が進行していた時，アクセントをもった ѣ は，e と違った音価をもっていたので，e>o の影響を受けなかった。ѣ が e と一致した時にはすでに，e>o の過程は終っていた。
2. верх, серп, четверг, верба, церковь, первый 等において。唇音，後舌音の直前の p は，本来軟子音 p' であったことによる。但し，前舌硬子音の直前の p は硬音である，дёрн, зёрна, мёрзлый, мёрзнуть, мёртвый, твёрдый, чёрный 等。軟子音の p' は，最近に至るまで標準ロシア語の規範とされていた。
3. купец, молодец, отец, подлец, сердец 等において。前述のように ц はシュー音に比べ遅れて硬化したことによる。e>o が進行中は，ц は未だ軟音であった。
4. деревенский, душевный, женский, любезный, полезный, служебный, учебный, честный 等において。ъ, ь が脱落する以前に н の直後に ь があり，н は軟子音であった，женьскъ. e>o が進行中，н は未だ軟音であった。н' は現代のある北方ロシア語方言に聞かれるという。
5. щекá — щёки は，веснá — вёсны, слезá — слёзы の類推である。
6. крéст（しかし перекрёсток), нéбо（しかし нёбо), падéж（しかし падёж), пéрст（しかし напёрсток), совершéнный（しかし совершённый）等において。é をもつこれらの語は，起原的には教会スラブ語であった。教会スラブ語には e>o はない。ё をもつ語はロシア語の基盤に生じたものである。
7. браслет, буфет, газета, комета, конверт, метр, момент, планета, проблема, ракета, рельеф, сквер, сюжет, тема 等において。e>o が活動を停止してからの借用語なので影響を受けなかった。
8. невод, недоросль 等において。接頭辞 не- には e>o がない。

次にこれまでの例とは反対に，e の期待される個所に o が現れる場合が屢々ある。これは類推作用の結果であると見てよい。以下例をあげる。

1. берёза の単数与格，前置格 берёзе において。ここでは з が硬子音である他の諸格 берёза, берёзы, берёзу, берёз 等の類推による。
2. 第一変化動詞 2 人称複数の берёте, несёте, идёте 等において。これは他の人称形 берём, несём, берёшь, несёшь, берёт, несёт の類推による。
3. 女性名詞軟変化単数造格 землёю, свечою において。これは女性名詞硬変化単数造格 водою, женою の類推である。
4. мешóчек, горшóчек, весёленький において。これはそれぞれ мешóк, горшóк, весёлый の類推である。
5. звёзды（звѣзды から）においては，сестрá — сёстры, веснá — вёсны の類推で，гнёзда（гнѣзда から）は，село — сёла, ведро — вёдра の類推である。

以上数すくない資料によってではあるが，e>o 現象をある程度明らかにしたいと思った。しかし，深い歴史の海に沈んだ多くの事実は，その片影を捉えることにすら困難を感じる。e>o の生成発展する過程は，多くの学者によって明らかにすることができても，やがて消滅していく過程については，殆んど分らないのに等しい。恐らく e>o を維持していく条件が，社会基盤の中で失われたのであろうが，それはどのような条件で，又，何に起因するのであろ

うか。あるいは，消滅するということは，常に，分らないということと同義なのであろうか。

## 参 考 文 献


Борковский В. И. и Кузнецов П. С. Историческая грамматика русского языка. М., Изд-во АН СССР, 1963.

Булаховский Л. А. Исторический комментарий к русскому литературному языку. Киев, "Радянська школа", 1958.

Соколова М. А. Очерки по исторической грамматике русского языка. Л., Изд-во ленингр. ун-та, 1962.

Устинов И. В. Очерки по русскому языку. Ч. 1. Историческая грамматика русского языка. М., моск. гос. пед. ин-т, 1959.

Филин Ф. П. Происхождение русского, украинского и белорусского языков. Л., "Наука", 1972.

Черных П. Я. Историческая грамматика русского языка. М., Учпедгиз, 1954.

Якубинский Л. П. История древнерусского языка. М., Учпедгиз, 1953.